

J. D. Salinger の世界

佐 藤 宏 子

I. はじめに

1961 年に出版された *Franny and Zooey* の wrapper に、J. D. Salinger は次の様子に書いた。“I live in Westport with my dog.” この言葉自体に何か変った所がある訳ではない。多くの人々は、「成程」と、そのまま真に受けてしまうだろう。ただ問題は、Salinger は Westport には住んでいないし、又彼の家には犬は飼われていないという事である。では何故彼はこんなうそをついたのだろうか。一つには、best-seller 作家の私生活に対する世間の目をくらますためであろう。しかしそれよりもっと面白いのは、“live in Westport with a dog” という言葉から我々が描く人間像であろう。上層中流階級で、*Saturday Evening Post* や *New York* を読み、絶えず世間体を気にして、社会の流れに自分の生活を合せていかなくては、安心してられない人々。そんな人間像が浮んで来る。云いかえれば David Riesman が *The Lonely Crowd* の中で、最近の米国での上層階級の特徴としてあげている、“other-directed man” の典型である。この人達は、物質的に満たされ、最早、忍耐とか「企業心」が必要でなくなって来た。そして「物質的環境ではなく、『他人』が問題となって来る」¹と、Riesman は云う。他人の考え、他人の動作、それが一人の人間の生活の規範になって来たのだ。David L. Stevenson が “.....it is merely that our religion, our family ties, our cultural traditions now give us a lighter armour than our predecessors wore.”² といっている事は正し

¹ D. リースマン著、佐々木、鈴木、谷田部訳、「孤独なる群衆」、みすず書房。1962, p. 19.

² David L. Stevenson, “The Mirror of Crisis”, *Salinger*, H.A. Grunwald, ed., New York, 1962, p. 38.

いと思う。そして、我々は、Salinger の作品の主人公の多くが、この型に属する人間、或いは、同じ環境に生れながらこういう型の人々を受け入れる事が出来ず、自己の identity を求めて苦しむ人々である事を思い起す。どうやら Salinger は、偽りの言葉で、読者の心の中に、「貴方と私は仲間なんですよ」という安心感を造り上げてしまって、相手を自分の世界に引き入れてしまうのだ。では、Salinger の世界はどんなものなのだろうか。

II. バナナ熱

短篇小説 “Down at the Dinghy” の中で、4 才の Lionel Tannenbaum は船着場の小舟の中にかくれている。母親の Boo Boo が何とかしてその理由をきき出そうとするのだが、彼は仲々話そうとしない。その理由は、女中の Sandra が家政婦の Mrs. Snell に “...Daddy's a big-sloppy-kike.”¹ と云った為なのだ。彼は実際は “kike” の意味さえも知りはない。“It's one of those things that go up in the air...with strings you hold”² と彼は母親にむかって説明している。彼にとって、その言葉がどんな意味かは問題ではない。重大なのは、自分の父親が他の人と異っているという事である。だから彼は自ら身にかくそうとするのだ。

この様に世間との異和感にさいなまされる人間の姿は、1951 年に出版された Salinger の最初で唯一の小説、*The Catcher in the Rye* の中に明瞭に描かれている。主人公の Holden Caulfield は 16 才。三つ目の prep school の Pencey をクリスマスの休暇と共に退校させられる事になっている。休暇の数日前の寒い土曜の午後、Holden はこの学校で自分をかわいがってくれた Mr. Spencer に別れを告げに行く。Spencer 先生は、彼にむかって、“Life is a game, boy. Life is a game that one plays according to the rule.”³ と人生訓をたれる。それをききながら、彼は “People always think something's all true.”⁴ と考える。人々は自分の考え

¹ J. D. Salinger, “Down at the Dinghy,” *Nine Stories*, New York, 1960, p. 65.

² *Ibid.*

³ J. D. Salinger, *The Catcher in the Rye*, London, 1960, p. 13.

⁴ *Ibid.*

ることが真実で、他の事も又、真実だとは考えないのだ。やがて、Spencer 先生は、Holden の出たらめの歴史の答案をとりあげて、声高に読みあげて、細い Holden の神経をいやが上にも傷つけてしまう。それは、Holden にむかって、“Do you blame me for flunking you, boy?”¹ ときき、自分の行為を正当化して、自分が悪く思われたいためである。こんな事なら別れに来るのではなかったと思って寮へ帰って見ると、同室の Stradlater は自分の美しさと女の子の事しか考えず、隣室の Ackley は、Holden の気分などにおかまいなく、彼の部屋へ侵入して来て暇つぶしをしている。その上、今夜の Stradlater の date が、checker をしている時 “She wouldn’t move any of her kings.”² という様な特徴で、Holden が自分と理解し合えると思っていた Jane Gallagher であるときいて、増々気分が沈んでしまった。“Laughed like hyenas at stuff that wasn’t even funny.”³ な友達の相手をするのもたまらなくなっていて、彼はその夜の間に、New York へひそかに出掛けてしまった。勿論、家へ帰る訳にはいかないから、ホテルに滞在し、落ち着き払った青年になって call girl を電話で呼び出してみたり、Greenwich Village の night club へ出掛けて大人ぶってみたり、田舎から出て来た三人の娘を相手に、ふざけて楽しんで見ようとする。そしてこういう偽りの姿の間に、Central Park の池の鴨が冬の間にどこに行くのかと思ったり、妹の Phebe や Jane Gallagher に電話をかけて話したいと思う、真の Holden の姿が現れてくる。彼が、いろいろな人間の“ふり”をしてみたり、又、無駄とは知りながら、お体裁屋の少女 Sally を誘ひ出して芝居を見に行ったり、snob の Car¹ Luce を呼び出して話しをしようと試みるのも、“to recapture his identity and his hopes for belonging”⁴ の試みであるのだ。自分の周囲の人を“phoney”と呼びながら、そして、彼等の行動に嘔吐をもよおしながら、彼は自分がどこかに属している事が確認したいのだ。そこで、「もしやわ

¹ *Ibid.*, 16.

² *Ibid.*, 35.

³ *Ibid.*, 40.

⁴ Stevenson, *op. cit.*, 38.

かってもらえるのではないか」という希望から Sally にむかって、prep school が何故 “full of phoney” であるのか、皆、お互いに「愛」などという人間的なものによってではなく、くだらない興味本位で関をつくり、自分はとてもそんな中には入れないのだということを説明する。

...all you do is study so that you can learn enough to be smart enough to buy a goddam Cadillac some day, and you have to keep making believe you give a damn if the football team loses, and all you do is talk about girls and liquor and sex all day, and everybody sticks together in these dirty little goddam cliques. The guys that are on the basketball team stick together...the goddam intellectuals stick together... Even the guys that belong to the goddam Book-of-the-Month Club stick together.¹

この Holden の言葉の中には、あの Riesman の云った現代人の姿が、あの自分の規準を他人に合さねば落ち着いて居られない「孤独なる群衆」の姿が、明確に浮き上って来る。この人達の人間性の喪失を Salinger は又、次の様に表現している。

Take most people, they're crazy about cars. They worry if they get a little scratch on them, and they're always talking about how many miles they get to a gallon, and if they get a brand-new car already they start thinking about trading it in for one that's even newer. I don't even like *old* cars. I mean they don't even interest me. I'd rather have a goddam horse. A horse is at least *human*, for God's sake.²

機械文明の象徴である車、そしていつも人より新しい車を持ち、それを人と比べて見たい現代の人間達。最早、精神的なものは何も残されていない。宗教でさえも、安易な気安め、商業主義の口実に使われている。Pency の卒業生で、葬儀屋の金持は学生達にむかってこんな話しをする。

He told us we ought to think of Jesus as our buddy and all. He said *he* talked to Jesus all the time. Even when he was driving his car. That killed me. I can just see the big phoney bastard shifting first gear and asking Jesus to send him a few more stiff.³

¹ *The Catcher in the Rye, op. cit.*, 137.

² *Ibid.*, 136.

³ *Ibid.*, 20.

ここにあるのは、敬けんな信仰ではなく、ただ “pretence of love” である。又、暇つぶしに入った Radio City Music Hall では、舞台に Christmas の pageant がくり広げられる。その華麗な舞台を見ながら彼は考える。

It is supposed to be religious as hell, I know, and very pretty and all, but I can't see anything religious or pretty, for God's sake, about a bunch of actors carrying crucifixes all over the stage. When they were all finished and started going out the boxes again you could tell they could hardly wait to get a cigarette or something.¹

そして “old Jesus probably would've puked if He could see it.”² と思う。彼はこの劇場の中で、もう一つの人間の醜さの例を見るのだった。映画は戦争で記憶を喪失した男のメロドラマだったが、隣席の婦人は、始めから終わりまで泣き通しだった。 “The phonier it got the more she cried.”³ この婦人はそんなに心のやさしい人かという、そうではない。自分の子供は、この映画の間中、手洗所に行きたくてぐずっているのに、この母親は取合おうともしない。

She was about as kind-hearted as a goddamn wolf. You take somebody that cries their goddamn eyes out over phoney stuff in the movie, and nine times out of ten they're mean bastards at heart.⁴

こう考えると、Holden は人間性を失ってしまった社会と、自己というものを生かして生活したい自分との間に、大きな亀裂がある事に気がつく。とても自分がどこかに属しているのだという安心感を得る事は出来ない。

すっかり失望した Holden は、家へ忍んで帰り、妹の Phebe に会った。妹は彼にむかって “You don't like *anything* that's happening.”⁵ といい、一つでいいから好きな事をあげてごらんという。Holden の考えつく事は、死んだ弟 Allie のことと、現在 Phebe と話しをしている事だ

¹ *Ibid.*, 143.

² *Ibid.*

³ *Ibid.*, 145.

⁴ *Ibid.*

⁵ *Ibid.*, 178.

けである。Phebe は続けて、将来何になりたいのとたずねる。彼は、たった一つになりたい物があつた。それは、この小説の題名、“the catcher in the rye” である。彼はこんな風に説明する。

Anyway, I keep picturing all these little kids playing some game in this big field of rye and all. Thousands of little kids, and nobody's around—nobody big, I mean—except me. And I'm standing on the edge of some crazy cliff. What I have to do, I have to catch everybody if they start to get over the cliff—I mean if they're running and they don't look where they're going I have to come out somewhere and *catch* them. That's all I'd do all day. I'd just be the catcher in the rye and all.¹

この子供達をいつまでも墮落しない無垢の状態、愛の世界に置いておきたいという彼の夢が“crazy”なものであり、不可能である事は彼自身がよく知っているのだ。そこで Holden は一つの逃げ道を考えた。hitch hike で誰も自分を知らない西部へ行くのだ。そこで啞でつんぼの真似をして、誰とも口をきかずにガソリン・スタンドで働き、森のはずれの日の当る場所に小さな小屋をたて、啞でつんぼの美しい少女と結ばれる。つまり、自分の妻とさえも交渉を持たず、世間から何もわずらわされないで生きて行きたい。これが Holden の自分の将来の夢なのだ。自分の穴の中で生きて行く事。これはどんな結末に導びいて行くのだろうか。

あの有名な短篇、“A Perfect Day for Bananafish” は、主人公 Seymour Glass を通してそれを示してくれる。この作品では、Seymour と妻 Muriel の住む世界の対立が大きく取扱われ、Seymour の死は、Holden と同様に妻の代表するあの干からびた社会の圧力に耐えられなかった為と考えられているのだが、² あの bananafish の挿話にもっと重点を置いて考えて見たい。

Seymour は海岸で少女 Sibyl に bananafish の話しをしている。

“You just keep your eyes open for any bananafish. This is a perfect day for bananafish.”

“I don't see any,” Sibyl said.

¹ *Ibid.*, 179-180.

² William Wiegand, “Seventy-eight Bananas,” *Salinger, op. cit.*, 125.

“That’s understandable. Their habits are very peculiar . . . They lead a very tragic life . . . You know what they do, Sibyl?”

She shook her head.

“Well, they swim into a hole where there’s a lot of bananas. They’re very ordinary-looking fish when they swim *in*. But once they get in, they behave like pigs. Why I’ve known some bananafish to swim into a banana hole and eat as many as seventy-eight bananas . . . Naturally after that they’re so fat they can’t get out of the hole again. Can’t fit through the door.”

... “What happens to them?”

... “Well, I hate to tell you, Sibyl. They die.”

“Why?” asked Sibyl.

“Well, they get banana fever. It’s a terrible disease.”¹

そしてホテルの部屋へもどると、眠っている妻の側でピストル自殺をする。彼の死は、妻の冷淡さのせいではない。それはあの “banana fever” のせいなのだ。結婚式にも幸福すぎて出席しなかった Seymour は、誰にも邪魔されない自分だけの世界をつくり出していた。つまりあの Holden Caulfield の未来の夢の世界、“passion to understand and evaluate our experience for ourselves”² の出来る所、自我を満足させる事が出来る世界を持っていた。そして彼は、Sibyl との関係で “awakened by the innocence of a child to enough awareness of the lost world he inhabits . . .”³ となり、自分は余り沢山の自己満足のバナナを食べてしまい、とてもこの社会の中でもう一度生活する事が出来ないのだ。だから、彼の死は、Leslie Fiedler の云う様に、一種の “salvation” であるかも知れない。

The Catcher in the Rye の中で、我々は Holden Caulfield に引きつけられ、自分と同化して見る事が多い故に、個人個人が独自性を失ってしまった、この社会への批判が強く目についた。これは確かに、現代社会の病いの一つには違いない。しかし、我々は、もう一つの病いがある事に気が

¹ “A Perfect Day for Bananafish,” *Nine Stories*, *op. cit.*, 16.

² A. Mizener, “The Love Song of J.D. Salinger,” *Salinger*, *op. cit.*, 35.

³ Leslie Fiedler, “The Eye of Innocence,” *Salinger*, *op. cit.*, 235.

⁴

つくのだ。つまり、バナナ熱である。社会から遊離してしまった Seymour Glass も、この社会から逃げ出したいと望む Holden Caulfield も、又、彼等に共感する我々も、この “terrible disease” の病人なのだ。どうやら、このバナナ熱の方が重症の様だ。では、Salinger の解熱剤は何であろう。

III. 解熱剤

Salinger は、これまでも、一時的な解熱剤を用いたことはあった。Phebe Caulfield がそうであるし、Sibyl もそうだった。つまり子供の innocence である。それは、好短篇 “For Esmé—with Love and Squalor” の中でよく例証されているのだが、Salinger は 1961 年に、一つの新薬を *Franny and Zooey* の中で発表した。

前篇 “Franny” では、Glass 家の末娘 Franny が Yale football の weekend に、boy friend の Lane Coutell と大学町の Sickler という restaurant で食事をしている。Lane は誇らしげに、“A” をもらった Flaubert についての paper の話しをしている。この “test tubey”¹ な paper の話しをきいているうちに、Franny は Lane の自己満足に耐えられなくなる。そして彼女は Lane にむかって云うのだ。自分がたまらないのは、彼だけではない。それは、彼の生活を基礎づけ、価値体系を作りあげているアメリカ上流社会のすべての行き方であり、又西欧文明全体でもある。

I'm sick of ego, ego, ego. My own and everybody else's. I'm sick of everybody that wants to get somewhere, do something distinguished and all, be somebody interesting.²

こう見ると、Franny は兄 Seymour と同様に、自分も、banana fever の患者であるという事には気がついている様だ。彼女はその病いを直そうとして、一冊の本を見つけた。この “The Way of a Pilgrim” という本は、一人のロシアの農民が祈りを通して救済をさがし求めた物語りであ

¹ J. D. Salinger, *Franny and Zooey*, Boston, 1961, p. 138.

² *Ibid.*, 29.

る。“Lord Jesus Christ, have mercy on me.”¹ というのが、祈りの言葉である。初めは信じていなくてもよい。ただ、この祈りを繰り返しているうちに、一人で口から祈りの言葉が出て来る様になると、この本は教えている。丁度、“in the Nembutsu sects of Buddhism, people keep saying ‘Nam Amida Butsu’ over and over again which means ‘Praise to the Buddah’ or something like that.”² と同様なのである。最後に Franny は気絶して倒れた後、

...lay still, looking at the ceiling. Her lips began to move, forming soundless words, and they continued to move.³

この祈りは Franny に救いをもたらしたのだろうか。どうやらそうではない様だ。結局、Franny は又、この祈りの中に、世間からの逃避を見出してしまった様だ。New York の両親の家へ帰った Franny は、父も母も相手にしないで、一人で自分の中に閉じこもっている。蜜柑を持って来て子供をあやす様に、彼女の機嫌をとる父親、スープばかり作って何とか食べ物を口に入れさせ様とする母、この二人を Franny はまったく無視して、ただ、「主の祈り」を繰り返しているだけである。学校も、先生達も、夏期劇場で一緒に働いた俳優達も、誰もかも ‘dopey’ で ‘phoney’ であると彼女は考えている。彼女にむかって、兄の Zooey が云う。我々は、“It’s a Wise Child” というラジオ番組に子供の時に出演してから、自分が世間の人より上の人間だという complex を持ってしまった。

“We’re freaks, that’s all. We’re Tattooed Lady, and we’re never going to have a minute’s peace, the rest of our lives, till everybody else is tattooed, too.”⁴

つまり、人が自分と同じでなければ我慢がらないのだ。そして、お前は人間の自我がやり切れないというけれど、一体、何が自我なのか。

...it would take Christ himself to decide what’s ego and what isn’t. This

¹ *Ibid.*, 27.

² *Ibid.*, 38.

³ *Ibid.*, 113.

⁴ *Ibid.*, 139.

is God's universe, buddy, not yours, and he has the final say about what is ego and what isn't.¹

我々人間には他人を批判し、自分を正統だと思ふ権利はないのだ、と Zooey は云うのである。Zooey は子供の頃、例のラジオ番組に出演するたびに Seymour が 'Fat Lady' のために靴をみがけ、といった事を Franny に思い出させて、次の様に云う。

And don't you know—*listen to me, now—don't you know who that Fat Lady really is?* . . . Ah, buddy. Ah, buddy. It's Christ Himself. Christ Himself, buddy.²

この言葉と共に、Franny は安らかな眠りに落ちて行くのである。ここで Zooey-Salinger が示しているのは、前向きの姿勢である。人間は、現在あるがままにすべての物事を受け入れて生きるのだ。そうすれば、心の安らぎが得られるだろうという事の様だ。この東洋思想的な一つの道は、確かに、バナナ熱の「新薬」ではある様だ。

IV. おわりに

しかし、その効力はどこまで続くものだろうか。昨年、*Franny and Zooey* が出版されると、一般的な東洋ブームと相まって、この考えは大変な反響を呼んだ。しかし、この思想自体に新味がある訳ではない。David Leitch は、この Zooey の答えを “a comfortable and accommodating one.”³ といっているのは正当であろう。Salinger の様に、特有の才をもっている作家から得るには、あまりにも陳腐な答えの様に思われてくる。そして、Salinger が例の、「私と貴方は同類です」よという技巧で、我々を、この曖昧な、生ぬるい世界の中へ引きずって行きそうな気がする。

“Many, many men have been just as troubled morally and spiritually as you are right now. Happily, some of them kept records of their troubles.”⁴ という Mr. Antolini の言葉は Salinger 自身のものに当ては

¹ *Ibid.*,

² *Ibid.*, 200.

³ David Leitch, “The Salinger Myth,” *Salinger, op. cit.*, 75.

⁴ *The Catcher in the Rye op. cit.*, 196.

まる。しかし、もし Salinger が、

You'll learn from them—if you want to. Just as some day, if you have something to offer, someone will learn something from you.¹

という点まで、彼の作品を価値づけ様とするならば、それは、今後の彼の仕事であろう。

バナナ熱の状態、社会と自己との葛藤をあれ程、明確に浮き彫りにした Salinger ではあるが、薬の研究はこれからという所らしい。

参 考 文 献

1. Grunwald, Henry A., *Salinger*, New York, 1962.
2. Salinger, J.D., *Franny and Zooey*, Boston, 1961.
3. _____, *Nine Stories*, New York, 1960.
4. _____, *The Catcher in the Rye*, London, 1960.
5. リースマン, D. 著. 「孤独なる群衆」, 東京, 1962.

¹ *Ibid.*

Résumé

The World of J. D. Salinger

Hiroko Sato

In his first and only novel, *The Catcher in the Rye*, J. D. Salinger writes about the loneliness of a sixteen-year-old boy, Holden Caulfield, who cannot stand the egoism and cruelty of the people around him. Holden wants to be a deaf-mute and to live where nobody knows him. His only dream for his future is to be "the catcher in the rye", to be the only grown-up in a field of rye among innocent children to protect them from the evil of the world. J. D. Salinger sympathizes with Holden and understands his desire for escape, but he also knows that Holden is seriously ill as this world is ill in the other way. Salinger named this illness, "banana fever"—the complete retreat from this modern world.

A remedy for this illness is suggested in Salinger's latest book, *Franny and Zooey*. It is to face bravely and accept this world as it is, since this is God's world, and it is God and not us who will decide what is right and what is wrong in this world.